

すばる望遠鏡の完成記念式典

すばる望遠鏡の完成記念式典とその関連行事が今年9月、マウナケア山頂及びヒロ市において行われた。紀宮清子内親王、フォーリー駐日米国大使をはじめ山頂の式典に132名、ヒロでの祝賀会には431名の来賓をお迎えし、すばる望遠鏡の船出を祝福頂いた。

完成記念式 (Dedication ceremony) は、長年支えただいた多くの方々や社会に望遠鏡の仕上がりをご報告する、大切な場である。準備委員会を設置して準備を始めたのは、式典の1年前だった。いったんは6月と決めた日程がGEMINIのDedicationとぶつかってしまったり、皇室への打診で藤田日本学士院院長に御心配をおかけしたりと紆余曲折を経てのことである。まずは資金集めで、小平台長はじめ三鷹の方々には頑張っていただき、目標を達成することが出来た。財政厳しき折に快く御寄付下さった多くの企業や国立天文台スタッフ、OBの方々に、お礼申し上げます。一方ハワイでは地元のさまざまな協力の体制作りを進めた。特にハワイ大学、在ホノルル日本総領事館、ハワイ島の日系人組織や州・カウンティの方々には、筆舌に尽くしがたい御協力を頂いた。「ハワイに根を生やした」すばる望遠鏡なのだという感を、一層深くしたのである。日程が近づくと、日本では招待者リストのツメ、ハワイでは輸送、会場、運営、ゲスト、安全警備、記念品、感謝状、見学、報道、記録など観測所の全員がグループを分担し、綿密な準備が進んだ。

9月16日、すばる望遠鏡による科学成果の記者発表を行った。バラの花のように拡がったリング星雲の見事なハロは、特に反響が大きかった。夕方、ハワイ観測所本部に紀宮内親王を御案内し、ハワイ大学ヒロ校のローズ・セン学長らも同席し

て、植樹をしていただいた。ハワイの州木、クワイの木である。ついですばる望遠鏡による観望のため、佐藤文部事務次官をはじめ20人ほどが同行して4輪駆動車で山頂に登った。ナスミス焦点にまだ観測装置が到着していない1カ月ほどのチャンスを利用しての、眼視観望である。視野3分角、倍率は3000倍。立体的な球状星団、見事に渦を巻く銀河に、内親王は質問の矢を次々繰り出された。御一緒した方々も美しい緑色の惑星状星雲に息をのみ、護衛の女性SPまで観望の列に並んで、短時間ながらこの珍しいイベントを楽しんだ。

翌17日は本番。輸送係は島中の4WDを動員して、大車輪。山頂式典での内親王のお言葉は内容もすばらしかったが、「意味は分からなくても実に優雅だ」とは、英語民族の感想である。佐藤文部事務次官が有馬文部大臣のメッセージを代読された。海部元総理の演説はやはりなれたものと、御婦人方の評判。私の司会は山頂効果で声が掠れ評判が悪かったが、皆で苦勞してセットしたくす玉がすばるの回転で首尾よく割れ、回転するドームの窓を開けて参加者から大きな歓声が上がった時は、一同「やったね！」である。ドーム内に設置した3つの臨時トイレの助けもあり、これだけ多くの参加者から高山病の方も出ず、無事終了した。

この間下界では、ハワイ大学ヒロ校での祝賀パーティーの準備に追われた。そのパーティーも、唐牛さんの司会でにぎやかに進んだ。ゲストが多すぎたのはみ出した観測所スタッフの不満、読み忘れた上院議員さん達のメッセージ、時間がなくてうまく配れなかったお土産、などなどの事は、とりあえず忘れましょう。すばる建設に働いて下さったメーカー31社の方々に、谷口三菱電機社長を代表として感謝状をお渡しし、森山元文部大臣や地元の方々ににぎやかに鏡割ならぬ「鏡開き」、小



山頂記念式典でのひとコマ。すばるがクス玉を割り、大きな歓声が上がった。

尾先生、古在先生はじめ居並ぶ天文学や関連分野の大先輩、日本とハワイ政官学界のお歴々、森本さんのにぎやかな声も交えて、この多忙にして幸福な一日は終わった。翌日、数十人のお客様をすばるに案内するという、最後の仕事を残して。

紀宮内親王は、観測所でもスタッフや家族と積極的に話され、真心込めて地元の人々と接せられた。ハワイの伝統文化を守る団体 Royal Order of King Kamehameha I とのハレポハクでの交流は、特筆に値する。何かあってはというまわりの心配に対し、内親王は是非ネイティブの人たちの儀式に臨みたいと熱心に主張されたとのことである。その結果としてネイティブの人々もすばるの式典に参加し、素晴らしいハワイ古式の挨拶を歌ってくれた。マウナケアの望遠鏡の増加にネイティブの人々か

ら厳しい批判が増している中、科学と文化との触れ合いの好例を現地社会に示し得たと言える。この出会いをアレンジされた小川総領事の英断にも、感謝したい。式典後、ハワイの人々の内親王への評価は「理想的親善大使」というものだった。

つつがなく（いや、つつがなくはホントによかった）盛大にこの行事を進め得たのは、何と云っても観測所スタッフ一丸となつての奮闘、また管理部や準備委員会など国立天文台全体の協力の賜物である。すばるプロジェクトも、ここで二つめの大きな山を越えた。もちろん山の一つめは今年はじめに行つたファーストライトであり、最後の三つめは、来年後半に予定している共同利用の開始である。

海部宣男
(ハワイ観測所)